目次

序論……1

第一章　もうひとつのエデンの園……11

陸地中心主義は、西洋文化において信じられている神話である。気候変動の進む現代、海、そして海と陸をつなぐ沿岸を舞台にした歴史に目を向けるときが来ている。

エデンの園の神話　15

栽培者である神は、ヘブライ人を楽園から追放した。

人類の真の故郷としての沿岸　21

採集民たちのエデンの園は沿岸にあった。

考古学がようやく動く　28

文明は海辺ではじまった。農耕も海辺で発明された。

真のエデンの園：ピナクルポイント　32

人類は、沿岸を進んで全世界に拡がった。

沿岸という移行帯で暮らした人類　39

多くの先史学者は、採集民と農耕民を区別し、採集と農耕を並行しておこなっていた人々の存在を認めようとしない。

石器時代の沿岸部の豊かさ　43

沿岸に暮らした人々は豊かな資源を享受し、文化を育んだ。

初期の沿岸文化 50
かつては文明は内陸から外に拡がると考えられていたが、異境とされた場所に文明の原点をいくつも見ることができる。

スカラ・ブレイ 54
陸と海が出会う場所は、生と死がつながる神聖な場所だった。

第二章　古代に海に出た人々と沿岸 59
われわれの祖先は農耕民ではない。彼らは海辺や川辺で栽培を発達させた人類の子孫なのだ。

人類が最初に到着した沿岸：インド洋岸 63
沿岸航行は、長距離交易をも可能にした。沿岸文明がいくつも発達していった。

環太平洋岸 67
太平洋の民は、何世代にもわたって島づたいに途方もない距離を横断した。

地中海沿岸：池のほとりのアリやカエル 71
ギリシャ人は地中海を「陸に囲まれた海」と呼んだ。古代では、大洋は小さな海の集まりと捉えられていた。

沿岸の交易帝国 78
古代ギリシャ人は、島を「陸にも海にも属するもの」と考えた。

地中海の制海権 81
ローマ帝国の植民都市は、大陸における「島々」である。

北大西洋沿岸 86
北ヨーロッパの国々では、海は領土であるとされ、制海権は重要な政治的要素だった。
沿岸の精神文化の起源 91
陸は秩序、海は混沌。陸は命、海は死。沿岸は、それらの境界であった。
大西洋の境界地 95
ノルマン人は故郷を出て、植物の種や動物を船に乗せて海を進み、移住したさきざきで独自の文化を再生した。

第三章　近世の大西洋のフロンティア …… 103
近世においても海を渡る者は、大洋を横断するより、沿岸づたいに進もうとした。
湿地の仲間、水辺の人間 104
人々は、湿地帯に水路と運河を張りめぐらせ、内陸と沿岸を行き来した。
大西洋岸 111
内陸の土地が封建化されても、国を超えた沿岸の仲間たちはこれに抵抗した。
舵と鋤（すき）を握って：海洋漁業のはじまり 115
沿岸では半農半漁の生活が営まれるようになり、陸と海両方の使用税が徴収された。
移動型の漁業 119
内陸の開発が沿岸の環境を破壊し、遠洋漁業がはじまった。
沿岸を基礎とする海上帝国 126
新大陸への入植者たちは、ヨーロッパ人の世界認識を持ち込んだ。

北大西洋文明における内海 134
地中海を知るヨーロッパ人は、広大な大洋より境界のある内海のほうがなじみ深かった。
海のフロンティア 139
アメリカの沿岸は陸と海、両方の資源に向かうフロンティアだった。
沿岸に広がった大西洋文化 144
運命よりめぐり合わせを信じ、たえまなく変わるものより生命の周期を重視する。
第四章　沿岸の固定 …… 153
沿岸は、死と再生、変化を象徴する。
沿岸とは不安定なもの 154
前近代において、文明を支えるものは水だった。そして「海岸線」が生まれた。
沿岸を線にする 159
人々は実利目的で自然を作り変え、沿岸を改造し、その営みの歴史を破壊していった。
沿岸を造る 164
陸にも国境という境界が生まれた。
港湾の誕生 166
内陸の開発が進み、沿岸には港湾都市が築かれ、沿岸は陸から海へと出ていく通過地点にすぎなくなった。
波止場地区の形成 171
職業の分化が進み、船乗りは専業になった。

漁村の〝最盛期〟 177
漁村は内陸や海外の商業市場の産物であり、それらの需要と供給の影響を受けた。
地の果て 187
沿岸はもはや境域でもフロンティアでもなくなった。「最も」定し、最も変化が少なく、最も効率的な」境界になった。

第五章　海の再発見 …… 197
海の発見は二度にわたる。一度目は、未知の陸地を求めた大航海時代だった。二度目の発見では、海は独自の歴史や地理を持つ三次元的な生物となった。
海は次第に好きになる味 200
かつて恐れられ忌み嫌われた海は、文化の中心に位置するようになっていった。
新しい水平線 205
海は、陸の人間が自己を映すために使う鏡となった。象徴や隠喩として、文化に君臨するようになった。
海が荒野になった経緯 210
陸上にフロンティアはなくなり、海が新しいフロンティアになった。
養生の場だった浜辺（ビーチ） 219
沿岸には、観光客たちが集まるようになった。
空虚の可能性 227
海辺の空虚さは、そのまま開発の可能性であった。

崇拝される場所になった浜辺 232
あわただしい現代生活から逃れるには、海辺で過ごすのが一番だと考えられた。
海をながめる 235
人々は空虚な浜辺で、いつまでも純粋な海を眺めつづけた。
第六章　沿岸の夢と悪夢 …… 241
われわれはある意味では、沿岸とより多く関わりを持つようになっているが、同時に沿岸を失ってもいる。
失われた沿岸 247
現代生活に伴う喪失感は、沿岸に投影される。
無国籍な漁業 251
漁業は巨大な産業となった。漁船は世界規模の航海をし、海産資源を求めつづける。沿岸ではなく、大規模港に寄港する。
港湾の衰退 255
船着場としての港町は衰退していった。そして、ウォーターフロントとして再開発された。
人の手で造り変えられた沿岸 259
ウォーターフロントは完全に陸の一部になり、接点でも通過地点でもなくなった。
沿岸の天国と地獄 268
われわれがサメに対して抱く恐怖は、海とのつながりを失った都市工業化の結果である。
防壁から荒廃へ 274

外敵や自然からの最良の防御とみなされた沿岸が、いまや防御を必要としている。
楽園にひそむ危険 278
かつての沿岸の住人は、海の危険を充分に知っていた。
結論：沿岸と共存するために …… 285
この半世紀、沿岸部への移住はつづき、これほどの短期間での大規模な人の移動は、人類史上に類を見ない。
不動産の時代 286
海岸の不動産は有望な投資物件となり、環境を犠牲にして人間の富を増やす場所になった。
過去から学ぶ 292
天災の歴史は、人間の適応力に関する有益な教訓を与えてくれる。
土の塊（かたまり）を海に浸す 297
自然を乗り越える方法は、征服しようとせず、ただ従うことだ。
謝辞 …… 303
訳者あとがき …… 307
参考文献 1
索引 20

図 30　更衣車．Thomas Rowlandson 作『Terror of the Sea（海の恐怖）』　222
図 31　『ペグウェルベイ，ケント州――1858 年 10 月 5 日の思い出』　225
図 32　ブラックプールの海岸，イギリス　226
図 33　海をながめる人々　231
図 34　浜辺の健康教室．ニュージャージー州オーシャンシティ，1920 年代　234
図 35　『9番街からの世界観』　245
図 36　海水浴場がある漁港は現代では珍しい　249
図 37　ドイツの工船　253
図 38　博物館船ペキン号．ニューヨーク州サウスストリートシーポートの海事博物館に停泊　258
図 39　サンフランシスコ湾のコンテナ船　261
図 40　『メキシコ湾流』．Winslow Homer 作，1899 年　269
図 41　シーワールドのシャチのショー，フロリダ州オーランド　272
図 42　第二次世界大戦時のイギリスの沿岸警備　275
図 43　移動前のケープハッテラス灯台，1999 年　277
図 44　シーランチの基本構想図　280
図 45　ハリケーン・キャロルがもたらした高潮　290
図 46　東北大震災の大津波による被害　291
図 47　ロングアイランドの海岸の釣り小屋，1902 年　294
図 48　沿岸浸食の跡．アラバマ州ドーフィン島，2005 年　296
図 49　水上住居．カリフォルニア州サウサリート，2004 年　299
図 50　『The Evolution of Man（人類の進化）』　300

図目次

図 1　シーランチの断崖に立つ看板，カリフォルニア州　8
図 2　エメリーヴィルの巨大な貝塚，カリフォルニア州　23
図 3　ピナクルポイントのほら穴からのながめ，南アフリカ　33
図 4　紀元前 10 万年以後の人類の移動ルート．Adam Davis 作　36
図 5　ドッガーランド．イギリスとヨーロッパ大陸の間の陸橋．紀元前 3000 年ごろ　42
図 6　トーロンマン．デンマークで発見された湿地遺体　43
図 7　チュマシュ族の漁労集落を描いた壁画　52
図 8　石器時代の集落遺跡スカラ・ブレイ．スコットランド，オークニー諸島　54
図 9　ヘカタイオスが描いた世界図．紀元前 500 年　62
図 10　インドのマドラス（現チェンナイ）の海岸に到着する船　65
図 11　マーシャル諸島の海図，rebbelib．ココヤシ葉柄が海のうねり，コヤスガイの殻が島を示す　69
図 12　羅針儀海図　77
図 13　船の形の墓，スウェーデン，ゴットランド　97
図 14　スカルホルトの地図　100
図 15　スカーイェンの埋没した教会，スウェーデン　106
図 16　ニューファンドランド島フェリーランドの漁業基地　122
図 17　『ヴァージニア地図』　127
図 18　ニューアムステルダム　133
図 19　ミウォク族のボート　138
図 20　船で運ばれる校舎．メイン州ヴァイナルヘヴンの港で　147
図 21　1755 年のリスボン大地震と津波の被害　160
図 22　「犬の穴ぐらの港」，北カリフォルニア沿岸　169
図 23　マンハッタンの鳥瞰図　173
図 24　多くの画家を魅了する「モチーフ1」，マサチューセッツ州ロックポート　184
図 25　ペギーズコーヴ，ノバスコシア州　185
図 26　ランズエンド岬，コーンウォール　190
図 27　『Driftwood（流木）』．ウィンスロー・ホーマー作，1909 年　203
図 28　バーハーバーの海岸で暮らすアメリカ先住民　213
図 29　流れ着いたタンブルホーム船型　217

序論

沿岸。沿岸はさまざまな形で存在する。この世界で暮らす者はみな、自分自身と世界の間に沿岸、境界、境界線、移行帯を持っている。[1]

――作家ジョン・A・マーレイ
『The Seacoast Reader』より

世界各地で沿岸部への移住がつづき、過去最大規模の人口移動が起こっている。世界の人口の半分が、海から一二〇マイル［約一九〇キロメートル］の範囲内に暮らす。アメリカではこの三〇年で、沿岸部の人口が約三〇パーセントも増加している。沿岸域と呼ばれる区域は、アメリカの国土面積のわずか一五パーセントだが、人口の五三パーセントが暮らす。オーストラリア、南アメリカ、アジア、ヨーロッパでも同様の現象が見られる。沿岸部に人口が集中していないのはアフリカだけだが、それでも沿岸部の人口は増加をつづけ、特に都市部の人口が急増している。いまやわれわれは物理的に、そして精神的にも、陸と海の境界に暮らしている。人類史上最大規模の人口移動を経験し、われわれは沿岸という環境に文化的に適応している過程にあり、極めて重要な時期に身をおいている。[2]

わたしが生きてきた歳月をふりかえっても、沿岸部は他の地勢とくらべて著しく変化している。陸の

人間による沿岸部の植民地化は海洋環境を大きく変えており、加えて沿岸部の地域社会の性質をも大きく変えた。沿岸はそこに住む人々だけでなく内陸に住む人々にも、まったく新しい意味を持ちはじめている。内陸に住む人々も海にますます意識を向けているからだ。現代では誰もがみなcoastal（沿岸の、沿岸に関係している）だといえよう。われわれは沿岸に住むだけでなく、沿岸と結びつけて思考する。沿岸は実際の地理であり、象徴化された地理でもある。

わたしの人生も、この大規模な海への回帰を小規模ながらたどっている。わたしはニュージャージー州で生まれ、幼いころはよく家族で海岸に出かけた。だが、幼少期と青年期の大半を内陸で過ごし、結婚して息子がふたり生まれたあとようやく、メイン州沿岸の小さな島で夏を過ごすようになった。当時は気づかなかったが、いま思えば、わたしは非常に重要な歴史的変化の中に身をおいていたのだ。現在は一年の大半をサンフランシスコのベイ・エリアで暮らし、夏はメイン州で過ごす。bicoastal（東海岸と西海岸の両方に生活拠点を持つ）と呼ばれる人間のひとりである。

この立場にいることはわたしにとって、そして社会にとって何を意味するのかを把握するのに半世紀もかかった。そしていまも、coastalという形を日々発見している。メイン州の島で夏を過ごすたびに、自分と海の関係が、海で生計を立てる島民たちと海の関係とあまりにもちがうことを痛感させられる。それでもわたしはようやく、沿岸に住むことと沿岸と共存することのちがいがわかるようになり、ただ沿岸で居住する人々と、居住するだけでなく沿岸という環境と何世代にもわたって関わってきた人々を区別して考えるようになった。そして島民たちが、自分たちはわたしのような「外から来た」人間とは

ちがうんだと訴えていることに気づき、またそうしたくなった気持ちを理解できるようにもなった。[3]

レイチェル・カーソンは名著『われらをめぐる海』でこう記している。すべての生物は海からはじまった。のちにいくつかの生物は陸に住むようになり、中にはクジラやアザラシのように海に帰る生物もいた。「結局、人類も海に帰る道を見出した」。物理的に帰ったのではなく、「精神的に、また想像の力で再び海に帰った」。カーソンはこうして科学者として、天賦の才能を持つ作家として、みごとに海に帰ったのである。そして、何百万人もの読者を海辺に導き、海岸線の両側に広がる貴重な環境を再発見させた。わたしは歴史学者として、同じことをおこないたい。ただしわたしは、自らの使命を沿岸の現在と過去を隔てる時間を超えることだと認識している。[4]

沿岸と沿岸で暮らしてきた人々について書くことは、驚きと発見に満ちた素晴らしい心の旅であった。その多くは、アーカディア国立公園が見えるこの小さな島から生まれた。ここにいると、海岸線も時間も容易に超えられる。この島の墓地には、この二〇〇年間の島の命と死が記録されている。わたしたちがここで夏を過ごす家は一九世紀に船長が暮らしていたものだが、メイン州の著名な作家ルース・ムーアもかつてこの家で暮らしている。ムーアは陸と海を熟知していた。ムーアの詩は沿岸の永続的な特徴だけでなく、何千年もの間に起こった大きな変化もとらえている。[5]

最初にここにやって来たのは　アメリカ先住民だった
五〇〇〇年以上も　ここで夏を過ごし

海辺には　彼らが捨てた貝殻の山ができた
だが開拓者に追い出された

そこから　歴史という概念が持ちこまれ
書き残された記録には
開拓者が沿岸の島々を支配しはじめたのは
せいぜい四〇〇年前だとされている

いまは不動産の時代だ
一棟が数十万ドルもする
コンドミニアムが立ち並ぶ
「海沿いは一等地」だ

開発業者の時代の次には　どんな時代が来るのか
人間は言葉にすることができない
だが　言葉を持たない沿岸の島々は知っている
そしていつの時代も　みごとに対処する

この沿岸では、過去はいまも生きている。実際には、アメリカ先住民はこの沿岸から出ていってはいない。西暦からしか遡ることはできないが、貝塚を残した先住民の子孫は毎夏ここにもどり、潮干狩りとシカ狩りをおこなっている。そしてヨーロッパからの入植者の子孫が加わり、いまも魚や貝をとり、古代とあまり変わらない方法で船をつくる。この沿岸では、毎年夏にやって来る郊外の人々でさえ魚や貝をとったり栽培をおこない、その方法は石器時代とあまり変わらない。

このような継続性はメイン州の沿岸のあちらこちらで見られるが、「つなぎ」の役割を果たしているものは特に見当たらない。この島で夏を過ごすようになって半世紀になるが、わたしは自分がここの自然や人類の歴史をあまりにも知らなかったことに愕然とした。理由のひとつは、歴史学を専門に学んできたことによって、わたしの目が曇っていたことだ。沿岸とは歴史のはじまりや終わりを示す場所、出発点としてのみ注目する場所として扱うよう教えられてきたからである。だから歴史学者は海より陸を、沿岸の人々より内陸の人々を優先するようになる。だがそれは、歴史学者に限ったことではない。カーソンが海辺という新しい分野を切り開いたにもかかわらず、環境問題専門家はいまだに足踏みをし、カーソンの挑戦を受け継いで「精神的に、想像の力で」探求を進めることも、沿岸という枠から歴史を見ることもしていないからだ。沿岸の動植物の運命は危惧するが、沿岸という生態環境の中の人類という要素、つまりHomo littoralis（沿岸人類）には無関心である。沿岸人類の歴史は沿岸の歴史と切り離すことはできない。われわれの誰もが、深刻な健忘症をわずらっているのだ。沿岸はふたつの生態系が重なったecotone（移行帯）と呼ばれる特別な場所であることも、沿岸はホモ・サピエンスのおも

な生息地であり、そのあとの人類の歴史の中心地になってきたことも忘れてしまっている。[6]

太古の昔、沿岸が大部分の人類の故郷だった時代があり、当然、そこには帰属意識が存在し、当時の沿岸は周縁というより世界の中心だった。だが今日では大陸や島の端とみなされ、沿岸の中というより、沿岸沿いに居住するという感覚が浸透している。現代の人間と沿岸の関係は、沿岸を知らない者と沿岸の関係だといえる。沿岸で何千年も暮らしながらも、人間は沿岸や海と共存する方法を忘れているからだ。沿岸での居住が容易になったのではない。過去にも海面上昇、魚の乱獲、海水汚染は起こっており、沿岸の住人は常に自然災害や人災に直面してきた。そして試行錯誤を繰り返し、この過酷な環境に物理的にも文化的にも対処してきたのだ。だが現在、沿岸を取り巻く脅威は規模も頻度もかつてなく増大し、そこに沿岸の住人の大部分が環境を破壊しないで暮らす方法を知らないという現実も加わって、事態は複雑になっている。まず、気候変動のメカニズムを解明することが急務だ。だがそれだけでなく、沿岸が周縁ではなく中心だった時代、滞在より居住する場所だった時代から受け継がれてきた適応方法を知り、活用することも不可欠である。[7]

海と沿岸に精通する作家ジェイムズ・ハミルトン‐パターソンは、著書『7／10（セブンテンス）――海の自然誌』で「われわれは故郷をなくしてしまい、そこに帰る方法さえ知らない」と自らの見解を記している。わたしはそこまで悲観的ではない。そうでなければ、何十万年もの時を超え、北アメリカやヨーロッパだけでなく、遠くアフリカやオーストラリア、ニュージーランド、日本、タスマニアの沿岸にまで及ぶ旅をはじめたりしなかっただろう。カーソンは「海の端はとらえどころがなく定義でき

ない境界」だと警告した。現代では沿岸の物理的性質がたえず変化しているだけでなく、沿岸の住人が多様化するとともに、沿岸の在り方も多様化している。いまこそわれわれは、人間が沿岸と共存してきたすべての方法を掘り起こし、二〇万年以上にも及ぶ歴史を発見する必要がある。先史時代の漁労採集民、古代のインド洋や地中海の船乗り、オランダという土地に干拓地をつくった人々、ロングアイランドの砂浜を熟知した地元民など、沿岸で暮らした祖先から学ぶべき教訓がある。(8)

この旅をはじめたとき、これほど古くまで時を遡り、これほど遠くまで空間を超え、このようにユニークな世界史ができあがるとは予測していなかった。そして旅を進めるうちに、驚くべき事実も見えてきた。真のエデンの園は内陸ではなく沿岸にあり、ホモ・サピエンスは陸と海が出会う沿岸という移行帯で進化した周辺種だと考えるのが妥当である。また、石器時代からグローバル化が進んだ現代に至るまで、新しいことは常に沿岸の住人によってはじめられ、変化は内陸ではなく沿岸で発生してきたことも判明した。その結果、わたしは内陸中心の歴史を覆すことが必要だという確信を強めた。それは従来の陸地中心の歴史と、深海中心の海洋研究への挑戦を意味するが、絶対におこなわなければならないことである。本書では、沿岸の歴史を六つの時代に分けて分析している。人類がアフリカの内陸部から最初に海にもどったときを起点とし、世界の沿岸に存在してきた継続と変化を掘り起こし、ひとつひとつに光を当てている。

図1の看板は、カリフォルニア州のシーランチというリゾート地の断崖に立っており、海をながめようと訪れた観光客を迎える。シーランチはサンフランシスコ北部の海沿いの、雄大な太平洋をのぞむ位

図1　シーランチの断崖に立つ看板、カリフォルニア州。（写真は著者提供）
［訳註］「注意：高波あり、崖崩れあり、海に背を向けてはいけません」と書かれている。

置にある。二〇〇七年四月の快晴の日の午後、わたしはこの看板に出くわし、しばらく足が止まった。そのあと何週間もこの「海に背を向けてはいけません」という警告が頭から離れず、何かを語りかけているように思えてならなかった。そしていつしか、われわれ人間と海との複雑な関係を解明したいという探求心が湧き、歴史学者の大部分が足を踏みいれたことのない時空を、こうして駆けめぐることになった。

本書を書き進める中で、わたしは沿岸がホモ・サピエンスの真の故郷であることを知った。人類と沿岸の関係はこの二〇万年で著しく変化しているが、人類は誕生時から現在に至るまでずっと、沿岸と離れることはできないでいる。沿岸は人類の形成において極めて重要な役割を果たし、一

方、われわれ人類も沿岸を現在の状態に変えた。この相互依存を明確に示すために、この考察を「The Human Shore（人類の沿岸）」と名づけることにした。これは共進化と共創造の物語だ。地球の環境危機が叫ばれる現代、われわれは陸と海が出会う人類の真の故郷に帰らなければならない。沿岸に住むだけでなく、沿岸と共存することを学ばなければならない。そうしなければ、われわれの存続も沿岸の存続も不可能である。